

常陸大宮市史研究

第1号

ごあいさつ	常陸大宮市教育委員会 教育長 上久保 洋一	1
創刊にあたって	常陸大宮市史編さん委員会 委員長 高橋 修	3
＜巻頭企画＞		
座談会 —市史編さんと「郷育立市」—	常陸大宮市史編さん委員会	5
＜研究ノート＞		
藤田稔写真資料仮目録 —旧大宮町出身の民俗学者・藤田稔の民俗研究（一）—	林 圭史	27
＜資料紹介＞		
香川敬三と明治の水戸藩士 —武田金次郎らの知られざる末期—	石井 裕	41
＜研究ノート＞		
常陸大宮市でヒメボタルを確認	佐々木 泰弘	52(25)
＜資料紹介＞		
文献に見られる常陸大宮市の植物（1）	藤田 弘道・中崎 保洋	66(11)
渡邊明氏採集の常陸大宮市内考古資料（予報）	萩野谷 悟	76(1)
常陸大宮市史編さん事業 活動記録		77
「常陸大宮市史編さんだより」まとめ		94
刊行物紹介		110

2018. 3

常陸大宮市教育委員会



【巻頭写真1】香川敬三肖像（個人蔵）
（石井裕「香川敬三と明治の水戸藩士—武田金次郎らの知られざる末期—」参照）



【巻頭写真2】ヒイラギソウ（藤田弘道・中崎保洋「文献に見られる常陸大宮市の植物（1）」参照）



【巻頭写真3】 渡邊明氏採集資料（萩野谷悟「渡邊明氏採集の常陸大宮市内考古資料(予報)」参照）



【巻頭写真4】 ヒメボタル（佐々木泰弘「常陸大宮市でヒメボタルを確認」参照）

常陸大宮市史研究 第一号

平成三〇年三月

常陸大宮市教育委員会

あいさつ

『常陸大宮市史研究』が創刊される運びとなりました。ご執筆くださった先生方をはじめ、事業にご協力いただいたすべての皆さまに厚く御礼を申し上げます。

さて、常陸大宮市史編さん事業は、町村合併、市政施行一〇周年となる平成二六年（二〇一四）より企画され、平成二八年（二〇一六）八月、茨城大学の高橋修教授を委員長に常陸大宮市史編さん委員会が発足し、本格的に始動しました。常陸大宮市全域を調査対象とする本事業は、市内に伝わる歴史や文化、自然環境などを総合的に調査し、地域の魅力を再発見・再評価する事業として、六つの専門部会を構成し、調査を開始しております。

常陸大宮市は、五つの町村が合併して誕生した、茨城県内で二番目に面積の広い市です。茨城県北部の中山間地域に位置し、那珂川と久慈川が流れる自然豊かな地域であることから、古来より人々の営みの場となっており、数多くの貴重な遺跡が発見されています。また、中世には佐竹氏一族が多くの所領を有したほか、江戸時代には水戸藩領として、西の内紙に代表される和紙や蒟蒻、火打石など、特色ある産物の宝庫である一方、幕末期には争乱の舞台にもなりました。このように、当市は多様な歴史を歩んできましたが、近年では地域住民の高齢化や史資料の散逸に伴い、貴重な歴史を次世代へ伝えることが困難になりつつあります。歴史を記録し、後世へ引き継ぐことは、自治体が果たすべき責務であり、市史編さん事業の大きな役割でもあります。また、当市は「郷育立市」を宣言し、郷土を知り、故郷内外で活躍出来る人材育成に努めています。その根幹となる基礎資料の集積を常陸大宮市史編さんが担い得るといっても、本事業の役割は非常に大きいと言えるでしょう。

最後になりますが、本事業の発展を祈念するとともに、皆さまのさらなるご支援とご協力をお願い申し上げます。挨拶とさせていただきます。

常陸大宮市教育委員会 教育長 上久保 洋一

創刊にあたって

「市史編さんの基本方針」に基づき、平成二八年（二〇一六）度、常陸大宮市史編さん委員会が組織され、市史編さん事業が本格的にスタートしました。「郷育立市」のスローガンを掲げる常陸大宮市の将来にわたる「まちづくり」の指針になるような市史の編さんを目指したいと思います。そのためにはこの地域の歴史や風土に関心をもつ研究者、そしてこの土地を故郷とする市民の皆さまのご協力が欠かせません。長期にわたる事業となることが予想されますが、どうぞ末永くご支援いただけますようお願い申し上げます。

学術的な市史をまとめるためには、市内外に所在する資料の調査・収集が不可欠です。それらをデータとして分析・研究することにより、はじめて客観的な歴史叙述が可能になります。特に編さん事業期間の前半は、こうした地道な作業に時間を使わなければならないため、編さんの進捗はなかなか皆様の目には見えてこないかもしれません。その陥穽を埋めるために、編さん委員会としては普及活動にも積極的に取り組みたいと考えています。また一方では見えてきた常陸大宮市の歴史像や、新たに発見された資料について、できるだけ速やかに内外に公開し、ご意見やご批判をいただきたいと考えます。『常陸大宮市史研究』の刊行意義は、この点にあります。

内容としては、市史を叙述するための研究成果はもちろんのこと、研究の途中経過の報告や、新たに発見された資料紹介、あるいは実施した資料調査の概要など、逐次誌上において公開していきます。われわれの研究・調査の成果を、いち早く市民にお伝えし、幅広い研究者に検証していただくことで、市史本編の充実につなげ、叙述や編さんの客観性を担保したいと考えます。常陸大宮市の歴史や風土に関心を持つ皆さまに、一人でも多く手に取っていただけるよう、充実した内容の研究誌を目指しますので、どうぞご期待ください。

市史研究の創刊にあたりご執筆・ご協力いただいた皆さまに、末尾ながら厚く御礼申し上げます。

常陸大宮市史編さん委員会 委員長 高橋 修

座談会 —市史編さんと「郷育立市」—

きょういくりつし

常陸大宮市史編さん委員会

〈趣旨説明〉

常陸大宮市史編さん事業が始動して約一年が経過し、調査の過程で市民と接する機会も次第に増えてきた。今後はより一層、事業への協力を呼びかけていかなければならないだろう。そのためには、多くの人に事業の概要を知っていただくことが肝要であり、その一環として、六名の部会長による座談会を開催し、市史編さん事業で取り上げるべきポイントや、今後の取り組み、「郷育立市」との関わりなどについて、思いの丈を語っていただいた。

《常陸大宮市史編さん委員会委員》

高橋 修…(市史編さん委員長、古代・中世史部会長)

鈴木 素行…(考古部会長)

添田 仁…(近世史部会長)

佐々木 啓…(近現代史部会長)

大津 忠男…(民俗部会長)

桐原 幸一…(自然部会長)

《常陸大宮市史編さん事務局》

石井 聖子(常陸大宮市教育委員会文化スポーツ課 参事)

高橋 拓也(主事)

渡瀬 綾乃(嘱託)

米山 寛(嘱託)



平成29年10月2日に開催した座談会の様子

変わり行く学説

高橋修(以下、高橋)…本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。『常陸大宮市史研究』第一号の特別企画ということで、編さん事業の中核となる私たち編さん委員が、編さん事業をはじめめる場を公開するというところで、座談会を企画していただきました。忌憚のないご意見をいただき、率直な意見交換ができればと思います。よろしく願います。

石井聖子(以下、石井)…常陸大宮市が五町村(大宮町、山方町、美和村、緒川村、御前山村)の合併で誕生して一〇年以上が経過しました。茨城県内でも多くの市町村が合併しましたが、そのなかでも先駆けて新しい市史をつくるということで、市史編さん事業がスタートしました。市民の皆さまにも、なぜ今自治体史を作るのかということをご理解いただくために、今回の座談会で、先生方にご意見をいただこうと思います。



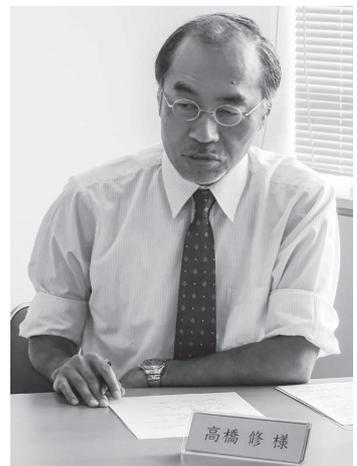
司会・石井聖子参事

五町村のなかで一番新しく作られた『美和村史』は平成に入ってから刊行ですが、それもすでに二〇年以上が経過しております。古いものは昭和五〇年代に刊行されており、この間、学問の世界では大きな進展がありました。かつては通

説として定着していた学説が否定される、ということも起こっていると思います。そこで、そのような事例を簡単にご紹介いただければと思います。まずは委員長を務める古代・中世史の高橋部会長からお願います。

高橋：学説が変化する要因には、社会状況や、研究を取り巻く様々な環境の変化などがあります。私たちのような歴史学研究者も時代を生きているわけですから、問題関心も変化し、事件の捉え方もまた変わっていきます。

私が専門とする分野では、武士や武士団の捉え方が近年になって大きく変わりつつあります。かつて、武士とは、在地領主あるいは開発領主のことを指し、人々を支配する側面や、東国の草深い農村を切り拓いていくイメージで語られてきました。特に、大掾氏だじょうしのような、国司や郡司に連なる権利を得て開発を進める豪族は、一族の所領を分割する一方で、惣領権、すなわち全体を統括する権限を創出していったとされます。一つの武士団として、分割された所領を持つ一族を統制する姿、『茨城県史』でそのような歴史像が見事に描き出されたこともあってか、どこの自治体史でも皆、同じような流れで叙述されてきました。



高橋修氏(常陸大宮市史編さん委員長、古代・中世史部会長)

す。武士は東国ではなく都で発生する。武士を一つの身分として捉えれば、身分を認定するのは天皇、朝廷ですから、武士は都で武芸を司る身分として成立するということとなります。そのことを重視すべきだという説が提起され、学界で承認されるようになりました。

ただし職能論、都の武士論が地域史的に武士を捉える際に有効な問題提起だったのかどうかという点については注意しなければいけません。都の武士論をそのまま地域に当てはめても、その地域の歴史像は豊かにならないのです。都の武士が地域の武士と接触することで武士団が形成されるわけですが、それを都の武士による地域社会の編成という、上からの論理だけでは説明できません。中世の地域社会が抱える様々な懸案を地域の武士と一緒にやって都の武士が解決することで、ようやく地域に受け入れられていくという過程をしっかりと捉えなければいけないのです。

都の武士論については新しい問題提起として、そこから色々なことを学ぶべきですが、そのまま受け入れるのではなく、新しい地域史の観点から地域の武士を再度描き直すことが、私の分野では必要になってきます。

一つ例を挙げます。家督や惣領の地位にある武士は、日常が旅だと思われるくらい、頻繁に都と行き来しています。都にいる者、鎌倉に



添田仁氏(近世史部会長)

しい支配の下で自由は奪われ、かつ国際的に孤立した暗愚な時代として描かれることも少なくありませんでした。百姓を例に挙げてみましょう。かつての百姓イメーシは、武士に支配されて物も言えず、年貢の負担に追わ

いる者、そして地元の本領、所領にいる者といったように、一族の中で分業関係が成り立ち、為替などの信用経済も上手に使っていきます。東国武士は西国にも所領をもっており、日本列島を股にかけて移動しています。そのなかで都市―地域間における技術や文化の交流が生まれ、地域社会に信仰がもたらされ、阿弥陀堂をもつ浄土式庭園を本領に造りだします。そうした遺跡が茨城県内にも残されています。地域社会が求めたものを武士が都や列島規模での移動によって、地域にもたらしているわけです。

このような新しい地域史的な観点から武士を描いていくことが必要です。自治体史にも取り入れるべき視点です。我々はこうした新しい視点も検証しつつどう地域史を描いていくべきなのか、常陸大宮市の古代・中世史部会に則してみても大きな課題になると思います。

石井…ありがとうございます。続きまして、近世史の分野ではいかがでしょうか。

添田仁(以下、添田)…近世史の研究については、一九七〇年〜八〇年代に大きな変化の画期があると言えます。それは、一言で表すと、「暗い近世史」から「明るい近世史」への転換です。かつて近世史は、前後の時代と比べて「暗い時代」と考えられていました。武士による厳

れ、「生きぬよう、死なぬよう」といった生活レベルで苦しんだ末に、百姓一揆を起こして弾圧される、というものでした。また、閉鎖的な村に押し込められて生活しているため、学問や教養から縁遠く、領主や悪徳商人に搾取されながら一生を終える、とイメーシされることもありました。もちろん地域差はありますし、イメーシ通りの悲惨な百姓もいたとは思いますが。それも近世社会の一面として見逃せないことですが、近年の研究では、そのような百姓が全てではないことが明らかになりつつあります。

たとえば、近世の百姓は年貢を納めるためだけに農業に勤しんだのではなく、商品作物や加工品の生産にも力を注ぎ、より良い条件で販売する逞しさも持っていました。生活を豊かにすることで、学問や文化をあらゆる場所で享受し、衣服や酒といった嗜好品も購入することができました。彼らは日々の暮らしを楽しみ消費者でもあったわけです。そして、武士に対しても主張すべきことは毅然と主張しました。大規模なものでは、村はもちろん、さらに広い地域の百姓たちが結集して訴訟を起こすなど、政治に対する主体性や協調性も持ち合わせていました。

先ほども話しましたように、このような視角で近世社会の解明が進むのは一九七〇年〜八〇年代以降です。この時期、市内では、美和地域を除いた旧町村史が刊行された時期と重なります。ただ、当時は分析の視角が変わり始めた時期であるほか、史料的な制約もあり、学界の研究動向や成果が大いに活かされているかといえば、必ずしもそうとは言い切れないと思います。常陸大宮市の市史編さんでは、「明るい」とか「暗い」といった評価に捉われないことなく、近世社会を生きた人たちの実像を歴史資料のなかからリアルに描き出したいと考えています。



佐々木啓氏(近現代史部会長)

石井…近世史に続く時代の近現代史の分野ではいかがでしょうか。

佐々木啓(以下、佐々木)…

近現代史研究においても、移動という視点を取り入れながら社会を描くということが大きなポイントになっています。私は一九三〇年

〇四〇年代の戦時期を中心に研究をしています。この時代の歴史像については、移動の視点を抜きに考えることはできません。たとえば満蒙開拓移民については、近年社会学や経済学なども含めた多分野で研究が進んでいます。青少年義勇軍や「大陸の花嫁」のことなど、個別の政策、事例について議論が深まっているほか、移民を送った側の地域社会の背景や実態に注目が集まっています。また、満蒙開拓移民とも深く関わりますが、戦地や外地からの「引揚げ」も研究が進んでいる分野と言えます。海外にいた日本人は、敗戦に伴う大混乱のなかで逃げ帰ってくるわけですが、ソ連によってシベリアに抑留されたり、身寄りを失って残留孤児となったり、あるいは途中で進退窮まって「集団自決」をしたりと、大変な苦難のなかに置かれていくことになりま

す。その時どのようなことが起こったのか、新しい研究や証言記録が相次いで出されており、実態の解明が進んでいます。

こうした研究動向の背景には、様々なものがあると思われませんが、製造業の生産拠点の海外への移転や、世界各地での難民問題の深刻化など、政治・経済・社会各領域でのグローバル化が進行し、従来の生活空間を大幅に越えて人々が移動するようになっていくことが大きく影響していると思われる。

また、近世史との関わりで言うと、近世が「明るく」なる一方で、近代は「暗く」なる、こういう関係があると思います。例えば、自由民権運動を例に挙げると、一九九〇年代ごろまでは、士族と豪農、そして民衆が有司専制(薩摩・長州出身を中心とした藩閥政府による専制的な政治体制)を進める政府権力に対抗し、相互に結びつきつつ議会開設や憲法制定を求めていくようなイメージがあったと思います。それは大正デモクラシーや戦後民主主義につながる「地下水脈」として高い評価を与えられていました。しかし、その後の研究では、民権運動家と民衆との関係が大きく捉えなおされるようになりました。つまり、政府対民権運動という構図ではなく、政府と民権運動がそろって民衆と対峙し、民衆を近代国家の担い手として統合していくという構図が採用されるようになったのです。民権運動はデモクラシーの扉を開いたのではなく、近代国民国家への統合という、民衆にとって抑圧的な時代への入り口となったという評価が現れました。また最近では、戦後デモクラシーという表現を用いて時代状況を捉える視点も出されています。アジア・太平洋戦争後の戦後民主主義などのように、戦争が終わると市民権の拡大を求めて人々が動きます。この原理を自由民権運動期に応用できないか、と言うわけです。こうした研究動向の背景としては、政治と人々の距離感が変わってきたことがあげられます。一九五〇年〇七〇年代ごろまでは、議会や政党が自分達の利益を代弁してくれるという前提が成り立ち得る状況がありました。しかし、近年では政治不信が進み、議会や政党を媒介に、国民と政治とが単純には結びつけられないという変化が生まれてきているのだと言えます。

石井…民衆はいつの時代も政治の影響を受けている訳ですか。近現代のマスコミの発達によって、政治と民衆の関わりは深く身近なものとなり、それはインターネットの普及によって益々進行しています。同じ



大津忠男氏(民俗部会長)

民衆という点では、民俗学では民衆の「暮らし」を見つめてきました。戦後七〇年を過ぎ、近現代史のボリュームが大きくなるにつれ、民俗学でもその政治的な影響を受けた人々の暮らしを無視することはできなくなっていると思います。今までの自治体史の民俗の記述は、ある程度の年限、現代化・近代化以前の時代を扱っていたイメージがありますが、現在、民俗部会ではどれくらいかの時代まで視野に入れているのでしょうか。

大津忠男(以下、大津) …民衆の生活の様子を知ろうとするのが民俗学なので、今を生活している人々のなかでも古い歴史を持っている方、特にお年寄りの方々から聞き書きをするイメージが民俗学にはあると思います。他の先生方からお話があったように、前の町村史編さんから四〇〜五〇年経って、新しい常陸大宮市史を編さんする意義を考えていくと、昭和三〇年代、四〇年代という時期を今一度考える必要があるでしょう。

実際に地域に行つて話をしますと、昭和三〇年代、四〇年代の話題になることがあります。「東京オリンピックの時に変わった」、「高度経済成長のときにガラッと変わったよね」という話が出てくるわけです。NHKの連続テレビ小説「ひよっこ」が放送されていましたが、「ひよっこ」のようにお父さん

が出稼ぎに行き、娘さんが集団就職で出て行く。「ああいう感じだよ」というように、一様に当時の様子を捉えてしまう傾向も見受けられます。しかし、実はそうではないという話を常陸大宮市ではたくさん聞く

ことができます。先日も鷲子地区(美和地域)へ調査に行き、一〇人くらいの方とお話をしましたが、ある人はやはり「昭和三九年を機会にガラッと一斉に変わった」、「やっていることも変わったし生活も変わった」と話していましたが、隣にいる方は「そうだったかな」と首を傾げていました。「昭和五〇年くらいまで俺は、ああいうことをやっていて、同じような生活が実は続いていたよね」と話すのです。

「表面上変わったと思うもの」と、「実は変わらずに続けているもの」との両方が混在しているのが、民俗の世界なのではないかと思えます。丁寧な民俗調査をしてそれを拾い上げることが大事なことを考えています。また、それが常陸大宮市では可能だとも考えています。政治史との関わりはなかで、大きな流れを考えながらも、常陸大宮市の人々はどうのように生きてきたのかを明らかにしたいと考えています。市史の編さんでは人々は何を大事にして、何を変えずに守ろうとしていたのか、それを今の人たちが読んで分かるような記述・編さんを心掛けていきたいと思っています。これは近年の学説の変化ではありませんが、市民の皆さまが暮らしてきた直近の四、五〇年というのは、既刊の町村史に記されなかった四、五〇年であり、この間に生活が大きく変わったと言われるけれども、何が違って何が変わらなかったのか、今後はどうだろうかといいことを問いつつ、記述したいと思っています。そのためには、おじいさんおばあさんの話を聞くだけでは不足する部分があります。先日の調査では三〇代の方達も一緒にお話をしていました。古い経験をお持ちの方に限らず、若い世代の方も含めて聞き書きをしていくことで、現実の姿を探っていきたくて考えています。民俗学における近年の新しい学説についての話ではありませんが、民俗部会では、日本全体の大きな流れのなかで、変わるもの変わらないものを考えつつ、常陸大宮市の姿を描いていくことに努めたいと考えています。

石井…今までの自治体史ですと、民俗は様々な地域のことを一括して一つの自治体の中の事象として書いてしまっていることが多かったと思います。お話を聞くのもお年寄りだけに聞くのが多かったわけですが、手法についても色々検討する余地があるようですね。

大津…これまでは多くの地域から事例を集めて、年中行事なら一月はこれ、二月はこれと並列して記述する形が多かったと思います。年中行事として取り上げ、一つの事例として独立させて比較することは比較的簡単です。ただし、それでは年中行事が行われている地域のコミュニティとの関わりが途切れてしまいます。地域と密着した行事として取り上げるのが最近の民俗学の手法になってきていますので、その点には注意していきたいと思います。

石井…地域を外部からの視点でどう捉え、どのように取り上げていくのか、中には新たな手法も考えていく必要性があるのではないかと思えます。学説の違いだけでなく、そのような歴史の捉え方という点について、考古学ではここ数十年の間かなり進展があったと思いますがいかがでしょうか。

鈴木素行(以下、鈴木)…旧自治体史との大きな違いは、「考古編」という呼称で括られていることですね。昭和の自治体史は、多くが「原始・古代編」という呼び方でした。考古学の対象はかなり幅広いのですが、主に文字が無い時代、文書が無い時代に大きな力を発揮するため、「考古学Ⅱ原始・古代」というイメージが由来だったと思います。最近では、文字のある時代についても考古学の手法、視点で見ることが進んできて、中世考古学、近世考古学、近代考古学、一番新しい時代では戦争考古学というように、各時代にわたって考古学の分析方法で遺跡から歴史を考えるようになりました。今回の常陸大宮市史では、原始・古代に限らず、それ以降の遺跡や遺物についても考古学の対象とすることを考えています。



鈴木素行氏(考古部会長)

旧自治体史の刊行から今までの間には、前期旧石器捏造事件がありました。一期、日本の歴史は七〇万年前にも遡ると世間を騒がせていましたが、それが平成一二年(二〇〇〇)に一気に崩れ去り、その後の検証作業で、前期旧石器時代はほとんどが捏造という結果になりました。『大宮町史』は昭和五二年(一九七七)に刊行されているので、ちょうど刊行から今回の市史の間に挟まってくる事件です。そのため、『大宮町史』では前期旧石器時代についてほとんど触れていません。恐らくその間に自治体史の編さんがあったところは事件の影響をこうむっていることでしょう。

もう一つ、考古学は旧い新しいという相対年代を中心に編年を組み立てます。しかし、具体的にいつ頃の物であるのかは、絶対年代との突合せが必要になります。絶対年代は、理化学的な方法で、「何年前」のような具体的な数字を出します。その方法の一つが放射性炭素年代測定法です。炭素14という放射性元素の半減期を利用し、何年前のものであるかを測ります。『大宮町史』では、例えば、縄文時代の始まりは今から一万年〜一万二〇〇〇年前であると説明していますが、現在では放射性炭素年代測定に暦年較正れきねんこうせいが加えられるようになりました。この測定法の当初は、炭素14がどの時代、どの地域も濃度が均一であると仮定されていましたが、時代や地域によって濃度が異なることが明らかになり、測定値と実際の年代の間には誤差があるため、補正する必要があります。この辺の有名なテフラテフラ(火山噴出物)に鹿沼軽石かぬまがあります。盆栽などに使用される「鹿沼土」ですね。



桐原幸一氏(自然部会長)

一九九〇年代には、三万二〇〇〇年前に降下したと測定されています。しかし、補正の結果、今から四万五〇〇〇年以上前のものとなっています。他には、今市・七本桜いまいちしちほんざくらというテフラがあります。一九九〇年代には一万二〇〇〇年〜一万三〇〇〇年前に降下したと測定されていますが、同様に一万四〇〇〇年〜一万五〇〇〇年前に補正されました。常陸大宮市周辺では最も古い土器が今市・七本桜のすぐ下あたりから出てきているため、縄文時代の始まりは一万二〇〇〇年前位というのが、私が学生時代に習った年代でした。しかし、現在では一万五〇〇〇年〜一万六〇〇〇年の間となっています。この三つを旧町村史と今回の市史の間にあつた考古学の大きな変化として取り上げておきたいと思います。

石井…ありがとうございます。いま、鈴木部会長から地質のお話が出てきました。地質や動植物など、常陸大宮市の自然について調査をする自然部会ではいかがでしょうか。

桐原幸一(以下、桐原)…生物分野では、「学説の変化」というくり方には少し外れるのですが、昔の生物相のまとまった記録がほぼ存在しない状況ですので、改めて生物相の調査を行う必要があると思います。

ところがその生物相自体が外来種生物等で大きく変わってきている。たとえば、水戸市では、今年に入り、特定外来生物のオオキンケイギクとアレチウリの分布調査を実施しました。アレチウリはかなり繁殖力が強いことが分かっています。

涸沼にそそぐ石川の両側は大部分がアレチウリで覆われてしまいました。今までは、在来種のクズが繁茂していた場所をアレチウリが全部覆うという、ちよつと信じられない状況になっています。

一方、一昔前に騒がれたセイタカアワダチソウは影を潜めています。セイタカアワダチソウが進入すると湿地が荒地化していく問題があります。オオキンケイギクが繁殖した後は、他の植物、在来植物が失われてしまう可能性があります。

また、人間による環境変化も大きな生物相の変化を引き起こしています。少し前に遡れば、列島改造や宅地開発の時期にも同じ事がありました。沢の奥や斜面など、人の入らないようなところは埋め立てられてしまいました。経済的な価値がないところは埋め立てられてしまい、そこにしか生息できない動物やそこに生育していた植物は、ほとんどいなくなりました。湿地とか斜面にいた生物がいなくなっているということがあります。トウキョウサンショウウオもそうです。それから、カラスガイも今ではほとんど確認できなくなりました。耕地整理で河川を改修することによって生き物が姿を消しているのです。自然の大きな変化の要因の一つは外来生物、そしてもう一つは昭和以降のいわゆる経済活動です。そのため、昔の姿が非常にわかりにくくなっているのが現状です。昔の生物に関する聞き取り調査を実施しても、「オシヤラクブナだつぺ」と大まかな分類でまとめて話されるので、昔の生物に関する記録を得ることが大変難しい。

経済活動と、その延長線上の外来生物、はたまた温暖化によって生物相が変わってきているのが現状だと思います。そのため、まずは現状の生物相を確認しなくてははいけません。

また、外来生物に限らず、在来生物の移動・変化も見られます。詳細は調査中ですが、今年の八月二二日に大賀江川の調査を行った際、

見たことない魚が国内移入で随分入ってきていました。また、北の地域に生息していたアオサギが水田一帯に見られる一方、かつてはそこにいたコサギの姿が消えてしまっているのです。

そのような変わりつつある生物相の現状をどのように書いていくのが課題です。

資料の保全と戦後史

石井…市史編さんは、異なる分野の研究者と一緒に、一つの地域を調査し、見直すという、普段は無い機会だと思います。その過程で様々な資料を見出すことになると思います。これらの保全も、市史編さんの大きな仕事と考えています。

高橋…学問を取り巻く環境の変化により、自治体史の編さんも、特に資料とどう向き合っていくのかという点において、以前とは異なってくると考えられます。

資料の概念も一九七〇年〜九〇年代と比べて大きく広がりました。例えば、有形の文化財については、当然のことながら、自治体の指定したもののだけを文化財と限定するわけにはいかない。未指定の資料の中にも、歴史や文化を伝える貴重な文化財が含まれています。そもそも文化財保護法の規定は、文化財には多種多様なものがあります。そのなかから特定のものに指定することによって保護することができます。こういう条文として読むべきものだと私は思います。時代や状況、人間の価値観が変わることによって、これまで注目されて来なかったものに高い価値が見出され、文化財としてのランク付けが変わっていくことは、誰もが理解していることだと思います。歴史資料についても、指定を受けた古文書や大事に管理されている公文書だけではなく、民間に保存されている様々な資料のなかにも、公的な性格を持ち貴重な歴史研究の素材となる文書は数多く存在しているのです。

日本の社会、特に近世社会では、庄屋が役所の機能を果たすなど、民間が公的な業務を請け負っていました。そのため、今でも公文書が民間社会のなかに大量に残されています。また、東日本大震災等々のレスキュー活動を経験して考えると、生活者一人ひとりの視点ごとに、何を資料とみなすかは幅があることに気づかされます。例えば、町内での重要な決定事項に関しては、持ち回り文書などの中に資料が残されます。家族の歴史は、当然家の中に記録が残されます。戦地にどういふ風へ赴き、誰が亡くなったかという歴史は家族のなかにこそ記憶が深く刻まれているわけです。さらにいうと、私たちが伝承資料と呼ぶ、従来であれば二次資料的な扱いをされてきた、後世になってから編さんされた資料もあります。このように、資料の広がりには非常に多様であり、歴史学の世界でも受け止めきれなくなっている。何を資料と考え、どう残すのかは、地域ごとに固有の事情があることに、自然災害にともなう資料レスキューを通して気がつきました。本来ならば資料を使って歴史学は組み立てられますが、資料のあり方自体が歴史学研究の有り方を変えつつあるのです。資料編ばかりではなく通史編を作っていくうえでも常に考えなくてはならない問題です。とくに文献資料、あるいは古い美術品等を扱う分野についてはそのことを常に考えながら進めていく必要性を感じます。

石井…確かに、個人宅で資料の調査をしますと、江戸時代の年号が記載されたものは重要視される一方、個人の手紙や日記類については重きを置かれず、結果として目録から落ちてしまうということが従来の自治体史では多かったと思います。そういうものを丹念に拾い上げていくことで、民衆に寄り添った市史を作ることが可能になってきますし、昔と比べて情報量が増えたため、資料の扱い方や、発信・収集の仕方についてもだいぶ変わってきているのではないのでしょうか。

添田…ボランティアで、歴史学を学ぶ学生や市民の皆さまと一緒に、自

然災害などで失われる危険性がある歴史資料の保全を進めています。自然災害のたびに、私たちは膨大な資料群に出会います。そのなかには古文書や美術品、使われなくなった道具類はもちろん、新発見の「家宝」も少なからずあります。しかし、被災地の文化財担当の職員は、当然ながら人命最優先で動かなければならず、文化財の保存にまで手は回りません。また、所蔵者自身がその重要性を認識していない場合もあり、廃棄されてしまうこともあります。

従来の自治体史は、地域に長く暮らす住民が自らの手で守り伝えてきた歴史資料や取り組みを活用して編さんされてきました。それらは地域の歴史や伝統を次の世代に引き継ぐかけがえのない営為の結晶であり、地元の方々の努力で残されてきたものです。しかし現在、過疎化や高齢化に伴い、地域や家庭で地元の記録や伝統を継承する力が弱まってきているように思います。災害に限らず、引越しや世代交代など日常的な変化によって、歴史・文化の語り手、そして祭りや行事の担い手が減り、無数の記録や伝統が私たちの知らないところで消失しつつあるのではないのでしょうか。

自治体史編さんは、地域の歴史や文化を書きとめる場であることももちろんですが、同時に、かけがえのない地域の記録や伝統を次の世代に継承していく「運動」でもあるべきでしょう。さきほどお話しした地域の現状をふまえると、地元の記録や伝統の継承について、従来のように歴史資料の所蔵者や伝統行事の担い手の努力のみに頼るのではなく、これからは自治体としてそれらの保存の環境を整えること、そして活用の道筋を図ることに力も注いでいく必要があるのではないのでしょうか。そのような意味でも、いまこのタイミングで市史編さんが始まることは、大きな意義があるように思います。

石井…ありがとうございます。資料の保全という点では、江戸時代はもちろんのこと、明治や大正、昭和期の資料についても、時間の経過と

ともにその重要性が増していると思います。今後の自治体史編さんにも大きな意味合いを持つようになると思いますが、近現代史部会ではいかがでしょうか。

佐々木…従来の自治体史との比較を考えた場合、近現代史に関しては今に近い時期に関するボリュームが増えてくると考えられます。合併前の自治体史の中でも最も新しい美和村史が刊行されたのは、今から二四年前の平成五年（一九九三）でした。来年は明治維新一五〇年であり、戦後から七三年になるということ考えると、近現代史のほぼ半分を戦後が占めるようになるわけです。これまでの自治体史の戦後史叙述を見ると、高度経済成長期までしか記述していないことが多く、一九七〇〜八〇年代の事柄については、簡潔に触れるか、そもそも全く触れないというところで、この時代に関するイメージが湧きにくい、という状況がありました。そういう意味では、一九七〇年代以降の記述は大きなチャレンジとなるでしょう。先ほどの「移動」に近い話となってしまうですが、戦時期の常陸大宮市に関連する史料を調べると、多くの方々がペリリュー島やニューギニア、あるいはインパール作戦など、激しい戦闘が行われた地域に送られて亡くなっていることが分かります。『山方町史』に記載されている戦病死者の名簿を確認したところ、その多くが南方で亡くなっています。また、旧八里村（緒川地域）の戦時資料を見ると、やはり南方で戦死された方が多いのです。この経験はしっかりと描く必要があると改めて思っています。今年、茨城県北を舞台にしたNHKの連続テレビ小説「ひよっこ」が話題になりましたが、主人公の叔父にあたる宗男もインパール作戦に参加した過去を持つという設定でした。高度成長を含め、戦後の人々の考え方や行動のあり方というのは、戦争を起点にしている側面があるのだと思います。そういう意味で、戦争経験を含めた戦後史をどう見ていくかというのは、大きなポイントになると考えています。

市史で特筆すべき点

石井…今回の常陸大宮市史を編さんするにあたり、各部会で調査が進んでいることと思います。そこで、興味深いところ、面白いところ、重きを置きたいところなどについて、是非ご意見をください。

高橋…古代・中世史部会では、佐竹一族についてかなりの比重をもって検討しなければならぬと思っています。鎌倉時代の史料は限られています。佐竹氏の成立と常陸大宮市域との関わりについては、岩瀬氏という、『吾妻鏡』に出てくる佐竹氏の被官の一族を、常陸大宮市域の岩瀬地区に関わる領主として位置づけられないかと検討を進めたいと考えています。学説が錯綜しているため、それを整理するところから始めなくてはなりません。この地域と佐竹氏との関わりを考える一つのヒントにはなると思います。戦国期には、部垂^{へたれ}氏を中心に、高部氏などの佐竹一族がこの地域に所領をもち、所領名を苗字とするようになります。常陸大宮市は、中心部に佐竹氏本宗家の本領がおかれた常陸太田市とはまったく対照的な地域です。下野との国境であり、那須氏や宇都宮氏との勢力圏の境界に配置された佐竹一族の拠点形成や所領経営のあり方を明らかにすることが課題です。

そして佐竹一族という武士団の全体像を捉えるには、市域全体を巻き込んで起こった部垂の乱をどう位置づけるのが問われます。佐竹氏の系図の中で、部垂一族は傍流のように位置づけられていますが、そうではなくなっていた可能性もあるでしょう。現在では、佐竹の乱(山入の乱)といった争乱よりも、むしろ部垂の乱を克服できたことが、佐竹氏が戦国大名化する上で大きな意味を持っていたという位置づけもされており、こうした学説の検証なども必要でしょう。

これらを具体化する作業として、例えば、常陸大宮市域は城郭遺跡が非常に良く残されているため、すべての発掘調査はできないにして



高部城跡(高部地区)



現代に残る南郷道(山方地区)

も、現地踏査を含めた縄張り調査が欠かせません。あるいは、寺社や信仰に関わる遺跡の中に、佐竹氏の刻印が非常に強く刻み込まれている感じがあります。伝承資料、特に分家や一族被官の家でまとめられた系図や家譜などの中に、佐竹氏に関わる武士の家で伝承された世界がどのように広がっているのか、近世史部会とも相談しながら、調査・採録を進めたいと思います。

もう一つ、指摘したいのは中世道の問題です。なかでも依上道^{よりかみみち}は注目されます。近世には南郷道^{なんごうみち}と呼ばれ、近年、少しずつその姿が明らかになっていきます。現在、那珂市^{なご}で下大賀遺跡の発掘調査が行われていますが、そこから中世の三間道^{さんげんみち}、幅五く六mという規模の非常に立派な中世道が発掘されました。おそらくこれが中世の依上道の一部なのでしょう。この依上道は北畠親房の発給文書などにも登場しており、白河と常陸国を戦略的に結ぶ道として機能していたことが知られています。東海道と東山道という日本列島の大動脈を形成する幹線道路と同じくらい重要な道と記述されています。そのルートに一部重なるで

あろうと思わる道が、直線道路で五、六mという非常な大きな規模で、しかもかなりの長さで発掘されたということです。常陸大宮市を通る道の全てがそういう道であったとはとても考えられません。中世の依上道の姿を考え直す非常に重要な問題を提起する調査成果なのではないでしょうか。常陸大宮市歴史民俗資料館では、すでに近世の南郷道を復元したすばらしい展覧会を実施しています。今回発掘されている道路は、近世以降のルートと少々ずれている部分もありますので、南郷道、そして依上道の位置づけは、常陸大宮市の歴史を復元する上で非常に重要な課題になるだろうと、関心を深めています。

石井…考古学のほうではいかがですか。

鈴木…これまで私が関わった自治体史では、最初は分布調査から始めていました。悉皆調査しつぱいに近く、地表面が見えている所は全部歩き、遺物を採集する調査です。採取された遺物で、その時代の遺跡の存在が推定されることになります。合併以前の、自治体の面積が小規模な場合には分布調査が可能ですが、今回の常陸大宮市は面積が広大かつ、その大部分が山地形、森林に覆われているため、地域の大部分が分布調査の困難な地域となっています。逆を言えば、山に形成された遺跡が守られているということになりますが、資料の実態としては白紙です。全域で試掘調査を実施するのはそれこそ難しいので、現在判明している遺跡や遺物について、その記録と評価を重視する方向で考えています。

考古資料には埋蔵文化財という呼び方もあります。旧町村史の場合、埋蔵文化財として発掘調査された資料が少なく、例えば、『大宮町史』では分布調査を基礎として、個人蔵の資料を調査し、図化していく方法を採用したのではないかと思います。ところが、近年になると埋蔵文化財の発掘調査が市内で急増しました。特に三美地区みよしでは、畑地整備事業によって広範囲が遺跡の記録保存の対象となったため、膨大

な量の遺物が出土しています。埋蔵文化財では、行政的な発掘調査が終わったら速やかに報告書を刊行する必要があり、時間や予算に厳しい制限があるため、報告書に掲載されなかった資料が山積みになってきているというのが現状です。常陸大宮市でも状況は同じで、それをもう一度、各時代の専門家の目を通して資料化し、考古学の資料集を作成していく方向で進めています。旧自治体史の資料や、古い発掘調査の報告書に掲載されている資料についても、その所在を明らかにすることも含め、市史を刊行する時点で、この資料は確かに常陸大宮市に所蔵されているということがわかる資料集にしたいと思います。もう一つは、これまで発掘調査の対象とならなかった遺跡や古墳の中には、採取された遺物や地表面の観察から様々な憶測が生じている遺跡もあるのです。市史編さんのなかで小規模でも発掘調査を実施し、実態を確認していきたいと考えています。

常陸大宮市の地域で特に注目すべきはメノウという石材です。どうやら縄文時代、弥生時代の一部にかけて、メノウに熱を加えて割り、石器を作るといった独特のテクニックを開発しているのですが、いつでもどこで成立したもののなか、いつまで続いたのかが解明されていません。千葉県で出土するメノウの中に、このメノウではないかと見られるものがあります。また、泉坂下遺跡を調査する発端になった石棒も、日立変成岩、多賀山地の粘板岩を石材として粗く形を整えてから、泉坂下遺跡に持ちこんで仕上げているらしいということが分かってきました。これも、千葉県のほうに流通しています。逆に、遠隔の地域から持ち込まれたものには、黒曜石やヒスイで作られた製品が知られています。ヒスイは、新潟県の糸魚川あたりから来ているのですが、同じように土器も来ているのではないかと思います。その製作地域を突き止めようと調べたら、魚沼地方の土器に良く似ていることがわかりました。地元の研究者に見てもらい、「この土器と違和感ありませんね」

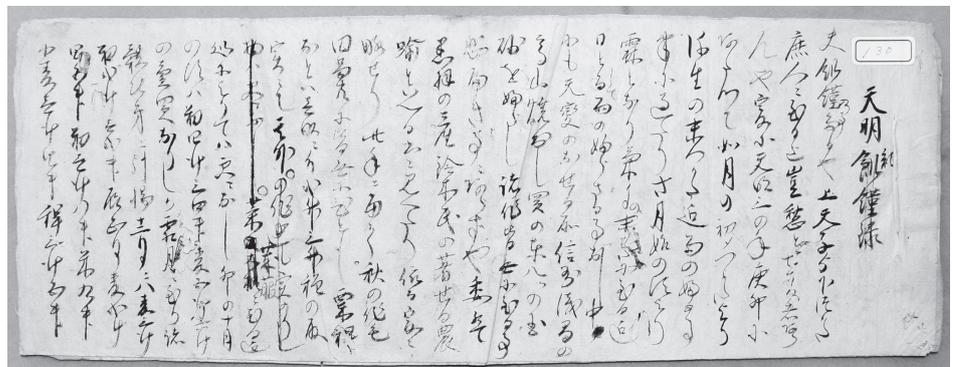
とアドバイスをいただいた土器が坪井上遺跡から出土しています。このように、他地域と交流を行い、生活が成り立っているというのはどの時代にも共通すると思いますので、そういった資源利用の実態や、人どうしの交流の実像みたいなものに少しでも迫っていければと考えています。

石井…近世史部会は、いかがでしょう。

添田…自然と人間が織りなす、豊かな時代としての近世に注目したいと思います。現在はのどかな農山村としてのイメージが強い常陸大宮市ですが、近世は少し違った風景が広がっていたと考えています。

たとえば、元禄一七年(一七〇四)二月に作られた下檜沢の「人数改帳」を見ますと、人口が一二八七人、馬が一五五頭で、人・馬ともに現在の数より多いのです。また、江戸の水戸藩邸や水戸の藩士家など町場での奉公に出ている者が四六人、さらに近隣の村との間での奉公人の出入りも数多く見られます。柔軟な職業選択の可能性と貨幣経済の浸透がうかがえるとともに、奉公人を介して江戸や水戸の都市文化や知識・情報が流入していたであろうことも推測されます。注目すべきは、村内に七〇歳代が三七人(男一八・女一九)、八〇歳代が一〇人(男二・女八)、そして九八歳の男性が一人確認できることです。同じ下檜沢では、寛政七年(一七九七)一二月、元禄九年生まれで百歳の女性が「至極達者」「珍敷長寿」の者として報告されています。平均寿命が五〇歳に満たなかったと言われる時代、下檜沢は高齢者が安心して暮らせる、豊かな地域だったと考えてよいのではないのでしょうか。

その豊かさを支えたのは自然の恵みでした。生業に目を向けると、農業や漁業はもちろん、和紙の生産を支えた楮をはじめ、諸沢の火打石、コンニャク、高部の材木など多様な産業がありました。地元で生産・採取したものを特産品として加工し、陸上交通はもちろん、那珂川・



天明飢饉録(下檜沢地区、小室家所蔵)

れを水戸城下近郊の百姓に貸し付けて世話をさせる仕法を提案しています。

ただ一方で、土砂崩れや洪水、獣害などのように、自然が人びとをくらしを逆に脅かす事象も確認できます。天災と呼ばれるものは、多くの場合、人災との複合的な災害です。近世の場合、その最たるものが飢饉です。干ばつや長雨などの異常気象も大きな原因ではあるの

久慈川・鬼怒川などの河川交通も利用して幅広く流通させることで、百姓のふところは潤ったのでしよう。そして、永田茂衛門らによつて久慈川に築かれた辰ノ口や岩崎などの江堰に代表されるように、自然をコントロールする技術も開発され、自然の恵みを持続的に再生産し、享受できるしくみを整えていったのです。そうやって百姓が蓄えた富は、大名の政治や経済にも影響を与えるまでになっていたのではないのでしょうか。たとえば、下檜沢の豪農・小室家は、寛政六年(一七九四)一二月、烏山藩に金二〇〇両を月一割の利息で貸し付けています。一方、高部の岡山家では、天保二二年(一八四二)八月、水戸藩の「御武備御引立」のために「御国恩軍馬」として一八〇頭を上納し、こ

すが、それ以上に、人びとの経済活動が影響しています。とくに、米価の高騰を受けて、百姓たちが自分で蓄えていた米をお金に換えたり、お米より儲かる商品作物を育ててみると、目先の利益を優先して大事な食糧の備蓄を怠ってしまうことが増えていた社会状況は見逃せないでしょう。前述の豪農・小室家には『天明飢饉録』という文書が残されています。これには、当主が下檜沢で経験した天明飢饉、地震や洪水等の自然災害、上小瀬村で起こった「数万の蝨」の大量発生といった「怪異」現象などが記されています。この記録が興味深い点は、飢饉のなかで百姓たちが生き抜く工夫や、現状を打開しようと努力する様子も描かれている点です。非常食の「葛子」「わらひ（蕨）」「かつら（葛）餅」などの記述もあります。近世の百姓は、危機的な状況に甘んじていたのではなく、具体的な策を講じて対処した上で、自らの経験を次世代に伝えようと腐心していたのではないのでしょうか。近世の災害観や社会適応のあり方を考える上でも、重要な史料だと考えています。

なお、近世史部会では、より充実した市史の執筆のために、市内に眠る歴史資料の発掘も必要と考えています。これには、地元の皆さまの協力が不可欠です。市史編さんの事務局や常陸大宮市文書館、近現代史部会や民俗部会はもちろん、地元の歴史研究会や旧町村史の編さんに力を尽くされた先達の皆さま、そして地区のリーダーの皆さまのお力添えを乞う次第です。

石井：続いて近現代史部はいかがですか。

佐々木：先ほども話したように、ペリリュー島やインパール作戦に関する戦争体験には、まだまだ十分に取り上げられていないことがあると思います。戦没者名簿を見て、これは掘り起こさなくてはいけないと思います。

また、明治初期に起こった小瀬一揆（那珂郡一揆）の歴史的性格

を、しっかりと見定めていくことが肝要であると思います。茨城県内でも一八七〇年代から自由民権運動は起こってくるわけですが、一方で、近世以来の百姓一揆の形態を引き継ぐ民衆の動きも、断続的に起こっていきます。これをどのように整理するかということです。小瀬一揆に関する資料を見ていくと、彼らが目指したものは一体何であったのか、安易には判定できないことに気づかされます。たとえば一揆勢は、「徳川御用」という旗印を掲げるわけですが、この意味をどのようにとらえるかは非常に難しい課題です。彼らとしても、すでに倒れてしまった徳川幕府を再興することが困難であることは分かっていたのではないかと思います。かといって、できて間もない明治新政府の権威が確固たるものとして理解されているわけでもありませんでした。一揆勢は近代的な権力を呪詛し、近世的な「お救い」を期待しているようにも見えますが、他方で一揆の指導者である本橋次郎左衛門（次左衛門）や鈴木教善のような人物は、もう少し冷徹に現実を見ているようにも思えます。この端境期の出来事の位置をしっかりと見定めることで、近代以降の歴史の見え方が変わってくるように思います。

資料の面については、メディアの発達という観点から柔軟にとらえていくことが求められていると思います。先日、本部会の佐藤美弥専門調査員が、戦前の大宮の街並みが分かる「大宮町協同商店写真集双六」という資料を発見し、紹介（二〇六、一〇七頁に掲載）してくれましたが、大衆社会が拡大していく状況のなかで、常陸大宮市域でもビラ・チラシといったメディアが日常生活の中に入り込むようになってきたことが分かります。また、特に昭和以降になると、カメラの普及が進みますので、写真をいかに有効に活用していくかが課題となります。さらに、高度経済成長期や一九七〇年〜八〇年代になると、各家庭でビデオカメラを持つようになります。家族の姿を撮影し

た映像などをどのように資料として活かしていくのかについても考えていなければいけません。そういった面でも、今回の市史編さんでは一九七〇年代以降のことが大事になってくると思います。

石井…ありがとうございます。民俗部会では、今年の夏あたりから、現地に入って地元の方の話を聞くような機会が何度かあったと思います。そこでの経験を踏まえて、いかがでしょうか。

大津…民俗部会では、四月からこの半年間、一〇回ほど地域に入って調査を実施しております。まず、民俗部会の基本的なスタンスから話します。先ほど鈴木先生からお話がありました。常陸大宮市は非常に広く、自然豊かな場所です。これは好条件である一方、全域で綿密な調査をするには広すぎるといふ問題もありますので、なるべく現地の概要をつかむことから始め、ポイントとなる地域を絞ってから現地へ入っていくように考えています。そのため、国勢調査や農林業センサス、国税庁の調査、茨城県立歴史館で所蔵している行政的なデータ等を利用して数量的なデータをきちんと把握し、客観的なデータで裏づけながら、従来の民俗調査を加えていく方法を採用する予定です。

また、写真は非常に有力な資料になります。幸いなことに、現在常陸大宮市出身の民俗学者である藤田稔先生が撮影した写真資料約二万点を茨城県立歴史館に寄託していただいています。そのデータ化がまだ終わっていませんが、データ化と並行して、内容を確認し利用させていただく予定です。また、常陸大宮市内における最初の調査でお世話になった方から積極的に古い写真収集のお手伝いもいただいています。大変ありがたいことです。写真資料については、客観的な資料として取り上げていく予定です。

添田先生がお話しされていましたが、自然を含めた環境によって生産業の変化が見られます。特に、山沿いの地域で生産される和紙などは、生産地から売り出すことによって、周りの地域との流通が興ってきま

す。茨城県にかぎらず栃木県などまで含め、地図を利用した流通状況の把握や、そこから更にその地域との民俗の関連、信仰・行事や年中行事まで触れていきたいと考えております。単なる聞き書き調査だけではなく、数量データを使いながら、客観性を重視した民俗調査を実施したいと考えています。



山の神行事の調査(鷲子地区)

もう一つ、実際に調査をしていて驚くことは、市域に住んでいる方の個人や地域の記憶力が非常に高いということです。こんなことは聞けないだろうなって思いながら現地に入っていくと、聞いているうちに自然と戦前の話や、高度経済成長前の時代の話をしてくださるのです。忘れ去られていると思われるものが常陸大宮市では受け継がれ、記憶されているという事実があつて、実際に調査現場で感動することが多くあります。全ての地域での悉皆的な調査は難しいのですが、地域を選んで民俗の基礎データを積み上げることは、学

問的にも非常に貴重なのではと考えています。そういった地道な作業ですが、民俗部会は一〇年間という時間が与えられているので、遂行していきたいと思っております。また、一〇〇歳近い方で、たいへん記憶力が良く、お話をしてくださる方がいますが、一方で「もう少し前だったらそういう人が居ただけど…」という問題にも直面しています。なるべく迅速にお話しを伺いに行くこともあわせて考えていきたいと考えています。そして、現地の調査にあたっては、私た



魚の脊椎骨(泉坂下遺跡出土)

ものがたくさん見つかります。人間の目は、2cmより小さいものは見落とすしやすいため、土をメッシュの上で水洗いし、残留物を選別するということを行いました。泉坂下遺跡の場合には、石器を作る時の細かなクズ等がたくさん出て来たほか、発掘の際には見過ごした石鏃なども出てきました。興味深いのは、タイ(鯛)の歯など、魚の骨が見つかったことです。魚の脊椎骨も検出されたのですがその種類がわからないので、淡水魚に詳しい稲葉さんをお願いしたわけです。ただ、生物としての魚類が稲葉調査員のご専門であるため、骨から同定するのは少々厳しいと思いつつ、もし分かったら良いなというくらいの気持ちでお渡ししています。

考古学では遺跡から検出された動植物から当時の生活を考えていく手法があります。例えば、植物の場合は、土器に残った種子の圧痕からレプリカを作成して、種類を同定することも行われています。また、植物の種子が水洗選別の残留物として検出されることも多く、これらの種子が栽培種であるのか、あるいは野生種かということが問題になります。このように、動植物と人間の生活との関わりという視点で見ることが盛んになってきました。しかし、先ほどもお話しましたが、他分野の研究者に調査を依頼しても、分野によって調査方法が異なるため、なかなか難しいことも実感しています。例えば、石器に関して、考古学では石材の産地を推定することが重要です。産地を出発点にして、人間がその資源をどのように利用し、製品が流通するのかという

研究テーマが設定されます。安山岩と同定されても、無数の穴がある多孔質安山岩や、割るとガラスのような割れ口をみせる安山岩があるように、その性状は多様なものです。安山岩というだけでは産地まで推定することはできないのです。観察や蛍光X線分析、あるいはプレパレートを作り、多くの石材標本と比較して初めて産地を特定するという手順になるので、これも単純に地質学の研究者に訊くわけにもいかないだろうと実は思っています。その一方で、一緒に仕事をしていきたいという気持ちもあり、実際にどこまで一緒に出来るのかを探りしている状態です。

石井…他分野とのキャッチボールみたいところで、高橋先生はどのようなことを期待されますか。

高橋…考古部会では、考古学の方法論に基づくスタンスをとり、原始・古代という時代の枠に捉われない分析をしていただくことになりました。そのメリットを活かしてもらいたいと思います。共同で議論しながら進めていくことは大事ですが、変に文献史学の側からの歴史像に接合して、おかしな話にならないよう注意しなければなりません。考古部会の方には、考古学者の視点からそれぞれの遺跡を評価し、歴史像を提示していただきたいと思います。その点はお互いに意識したいところです。

先ほど話題に出た下大賀遺跡では、馬の頭骨が出土しています。中世の交差点跡のような場所の底には獣骨が発見されました。切り落とされた馬の頭が何箇所も納められ、銭も納められている。このことを、民俗部会の方はどうみるのか。有益な意見交換がここでもできるのではないかと思えます。このように一つ一つ、事象に即して相互に検討できたらと思います。

石井…近世史ではいかがでしょうか。

添田…他の部会との連携は欠かせません。たとえば、人や物の交流とい

うことで申しますと、もちろん近世でも盛んだったことが帳簿や日記などで確認できます。しかし、記録として残されているやりとりはごく一部だと考えています。そのようななかで、重要なのは大津先生の民俗部会の成果になると思います。

私たちも調査で蔵の中に入れていただくことがあります。すると、大抵の場合、古文書はわずかで、大半は膳碗類や骨董品、農具などの民具と呼ばれるものです。民具については門外漢ですが、近世の膳碗類について言えば、冠婚葬祭など、大切な節目に揃えるものです。そのような意味では、当時の人たちからすると、膳や碗は、私たちが考えている以上に思い入れの深い品物だったのかもしれない。では、膳や碗からどのような情報が読み取れるのか。膳や碗が収められている箱には、いつ、どこで買ったのか、何に使ったのかということがくずし字で書き付けてあることがあります。しかし、そのような文字の記載がなかった場合、私は正直何も読み取ることができません。ところが、民俗学の専門の方に見てもらおうと、漆器の材質や形状から、産地がどこで、誰の手によって作られ、どのような経路をたどって送られたものなのか、といったことが明らかにすることもあります。

同じようなことは美術品にも言えます。蔵を開けると、当主の喜寿などのお祝いに、色々なところから書き寄せられた絵や書を貼り混ぜたような屏風が見つかることがあります。絵や書はもちろん、それらに添えてある賛や落款は、当時の文化的、あるいは学問的な交流の広がりを示しています。私は美術の素養も全くなく屏風の前で立ち尽くすだけなのですが、民俗学や美術史の専門家に一つずつ見てもらうと、実は江戸や大坂、京都といった中央画壇の有名な画家や高名な書家が描いたものである場合もあります。現在の風景からは想像できないような人脈、文化的なネットワークの広がりが見られるようになるのです。

このように、膳や碗も美術品も、文字という形では残らない、近世

の人びとの日常的な営みや交流の具体像を知ることができると、大事な手がかりになります。そのようなところで民俗部会はもちろん、専門の分野を超えた多様な交流と連携が不可欠だろうと思います。

石井…では近現代部会はいかがでしょう。

佐々木…近現代史部会の場合、近代以降の政治・社会・経済の目まぐるしい変化が前提にありますので、他の時代などは、なかなか連携が作りにくい分野になってしまいかもかもしれません。しかし、古代の歴史を二一世紀に生きる我々が書いたり論じたりするように、近現代の時代に、前の時代の記憶や歴史が「生産」される例がたくさんあるだろうと思います。近現代という時代を生きた人びとが、それよりも前の時代の歴史の何に注目し、残していこうとしたのか。水戸黄門の歴史にしても、佐竹氏の歴史にしても、それを叙述する時代の性格が反映されているはずで、そういった意味で、それぞれの時代の先生方と一緒に資料を見ながら考えていくことができるのではないかと思っています。

民俗部会ではすでに聞き取りを始めているということで、私たちの部会でも聞き取りを始めないといけないという話をしております。近現代史と民俗では聞き取りのポイントが全然違ってくると思います。その成果は共有したほうがいいのではないかとも思います。私たちは政治や経済を中心に話を組み立てていくことが多いかと思えますが、多様な聞き取りの成果を組み合わせることで近現代の歴史を蘇らせ、最終的には叙述に組み込んでいきたいら面白いと思います。そのあたりの知識や方法を含めて知りたいので、ご指導をいただけたらありがたいと思っております。

石井…だいたい皆さんの期待の高い民俗部会はいかがでしょう。

大津…添田先生からお話があったように、蔵に入り、そこで二〇人揃え、三〇人揃えの漆器が見つかったら、「これはどういう時に、どの

ように使ったのですか」と聞き取りをしたり、箱の書き付けを読むこともあります。しかし、現地では、読み切れないというのが現状です。文字を読むことができれば、客観的な内容を知ったうえで聞き取りを出来るのに、文字を読みきれないために情報を取り落とししているのではないかという不安が付きまといまいます。お互いに得意なところを調査するという形であれば、共同で蔵を調査するといったように協力していくのが一番良いと思っております。

佐々木先生のご提案については、私たちも同じような時代を取り扱いますが、事件とか政治について、話者との関わりを深く聞くようなことはありません。しかし、それらが背景となり、生活や考え方が変わったということは当然あるでしょうから、お互いが深く関係する分野については調整し、相互に情報交換をしながらやっていければ良いと思います。しかし、まとめの段階、例えば、写真集を作るとなった時には、民俗部会の考え方のなかで写真集や資料集を作っていきたいと考えています。そういう点では、事件や政治に関係がある写真は近代史部会にお願いするなど、住み分けはしていく必要があるだろうと考えています。また、話が変わりますが、自然の分野、例えば木や石、岩の違いは重要なのですが、話者から説明を受けても、十分に理解できないことがあります。自分の勉強不足なのですが、そういうことを自然の先生方にご指導していただければありがたいと思っております。現在、調査の日報を事務局に提出していますので、それを確認しながら声かけをいただくといい方法かと思えます。

石井：近世史部会と近現代史部会は、近々合同調査を検討しています。他の分野に関しても希望がありましたら、是非お話いただければと思います。いかがでしょうか。

高橋：さきほどの三人のお話を聞いて感じたのですが、近代になって発展した学問は、それぞれの分野に即して資料群を分類してしまいま

す。しかし実際には、美術品や古文書、民具、写真資料、あるいはそれに即した伝承などが、一緒に同じ建物の中に納まっている。資料の伝来の場面性や場所性のようなことも問題にして、相互に関連付けながら個々の資料を分析しなければいけない。資料に歴史を語らせる時には、場面や場所に注目して復元する必要があるのではないかと思っております。

「郷育立市」と『常陸大宮市史』

石井：常陸大宮市では、昨年の三月に「郷育立市宣言」を行いました。この宣言は、郷土で活躍する人材の育成を掲げたもので、郷土を知る、すなわち先人達の歴史を受け継ぐことが地域で輝く人材の育成につながり、ひいては街づくりにつながるというスローガンとなっております。この「郷育立市」は市史編さん事業と親和性が高く、市史編さん事業開始の機運を高めました。そこで、現在の常陸大宮市で市史編さんをおこなうということは、「郷育立市」という立場を踏まえてどのような意義があるでしょうか。また、「郷育立市」とのつながりとして、常陸大宮市史を新しく作る意味について、先生方にお話を聞きしたいと思えます。それでは、高橋先生からお願いします。

高橋：常陸大宮市は「郷育立市宣言」を公にしました。これは、市政の重要な柱として「郷育」重視を明確にされた点で、非常に画期的なことでしょう。そのなかでも、人づくりを重視するという点で独自性があり、特に、今の世の中でそれを打ち出すのは大変大きな意義があると思えます。市史もその中に位置づけていく必要があると思えます。

この宣言を改めてよんでみると、故郷の先人とのつながりということから、故郷への愛情を育んでいくという論理で文章がまとめられています。市史との関係において私たちの立場から言えば、やはり受け継ぐべき先人の行いとは何かを明らかにすることが、常陸大宮市史の

役割になると思います。もちろん、その中には誇るべき歴史もあれば、辛く苦しい歴史もあることでしょう。私もその通りだと思いますが、そうした先人の行いについて、反省しつつ考察する必要性も訴えておきたいと思います。漠然と郷土愛が先行するのは矛盾であって、「郷土とは何か」を客観的に正しく学んだ上で、愛すべき郷土を認識することになるはずで、私も、尊重すべき先人たちの行いがこの地にはあると思っています。この点が、「郷育立市」宣言を市史と関わらせる上での一つのポイントになるのではないのでしょうか。自治体史は、「郷育立市」の志を根拠づけ、あるいはそれを検証するという位置づけになるわけです。そのため、誰かに都合のいいような叙述だとか、耳に優しいだけの叙述で構成してはいけなと思っています。より客観的、中立的、科学的に、故郷とは何なのかを解明し、叙述していきたいと、この宣言との関係で強く思います。

石井…続いて、近世担当の添田先生いかがですか。

添田…「郷育立市宣言」を実質化するために、市史編さんの取り組みのなかで何ができるのか、ということを考えています。とくに、近年の自治体史編さんは、本を作って終わりではなく、自治体史を通じて新たな地域の魅力を発見し、それをまちづくりに活かしていこうとする事例も報告されています。ポイントは、地元の人びとが活躍できる編さん事業をどうやって組み立てるかということだと思います。

たとえば、兵庫県姫路市の北、平成の大合併で消滅した香寺町では、平成一〇年（一九九八）から『香寺町史』の編さんが進められました。通常、自治体史編さんは、地元の郷土史家を中心となって編さんを進めるか、外部の専門家や研究者に編さんを委嘱するかのどちらかになると思います。しかし、『香寺町史』は、それまで歴史や文化に携わってこなかったような人たちがまで参加する取り組みになった点が特徴的です。編集の基本方針には、町民は単なる読み手となるのではなく、

広く町民が参加する町史作りを行い、その結果、町民の要望に応えられる町史としなければいけない、といったことが謳われています。全四巻の町史のうち「地域編」は、地域の景観や生業、信仰など、地元での日々の暮らしに馴染みの深い分野について、地元のみなさんが自分たちの手でまとめたものです。七、八年かけて一〇〇〇ページ以上の大部の町史を作り、結果売売をしたといっています。

興味深いのはその後の展開です。香寺町では、自治体史編さんが終わった後も、町史を執筆した人びとが中心となって、自分たちが暮らす地区の調査や、史跡の活用を始めたのです。地元の魅力を、自分たちで掘り起こす取り組みです。たとえば町史編さんの過程で発見された古写真をつかった写真展、それらの写真を見ながら昔話を語る会を企画したり、あるいは中世の山城や古墳の調査を始めたり、地元に溜め池を作った先人を顕彰する碑を建てようという企画もありました。活動の経費は、各地区の自治会の予算で賄われていたようです。

もちろん香寺町のような取り組みを実現することは、なかなか難しいとは思いますが。ただ、地元で暮らす人びとが自分たちの手で地元の魅力を発掘し、それを次の世代に伝えていくことができる環境としくみを作ること、それも「郷育立市」の理念を具現化するために、市史編さんが果たすべき大事な役割のように思うのです。

石井…佐々木先生いかがでしょうか。

佐々木…日本社会全体もそうですが、二〇二〇年代の常陸大宮がどうなっていくのかということ想像するのは、とても難しいことです。近現代史の立場からすると、高度経済成長期以降の大きな流れとして、都市への人口集中とそれに伴う農村の過疎化という問題が出てきます。常陸大宮市として、この問題とどうやって向き合うのかは大事なこととしてありつけてきたわけですし、今後問われつつあると思います。そして、その状況を考えた時に、戦後史という時間的な



高部宿の街並み

かで、変化していく社会を見据えながら、この地域の人たちがどのような社会を目指して格闘してきたのかを、うまくいかなかったことも含めて、一つ一つ丁寧に描いていければ、と個人的には思っています。「郷育立市」との兼ね合いで言うと、この地域にはたくさん誇れる文化財があると、この仕事を始めてからあらためて実感しています。近現代という時代に限っても、

高部宿の街並みなどはとても趣深く、価値がある財産だと思っていますし、多くの先人が守り、語り継いできた小瀬一揆の史跡なども、もっと広く知られてよいものだと思います。ただし、その一方で、近現代では成長・発展だけでは語れない、多くの辛い歴史があります。戦争はもちろんのこと、人口流出が続いてきたという現実も、辛くて悲しいことかも知れません。そう考えると、誇りは誇りとしてしっかりと描きつつ、誇れないことについても描かないといけないことがあるかと思えます。郷育立市につながり、今後のまちづくりにつながっていくような素材を、歴史のなかに見出し、いいことも悪いことも含めてちゃんと伝えていける、そのような形になればと思っています。

石井…考古部会はどうでしょうか。考古学の分野では、地元で出土した遺物や文化財を使った授業やワークショップが盛んに行われるなど、教育普及活動との結びつきが強い学問ではないかと考えられますが、「郷育立市」のなかで考古部会が果たす役割とはどのようなものが考えられますか。

鈴木…文化財など歴史的な遺産は、その地域が持つ資源の一つだと考え

ます。その資源を「郷育立市」では、学校教育や、地域振興にも活用していこうというわけですから、基礎となる資源の価値は、確かなものでなければなりません。冒頭でお話した前期旧石器捏造事件のようなことがあってはならないわけです。歴史的な遺産の価値を確実なものとして明らかにしていくことが、市史編さんの役割なのであらうと思えます。

石井…自然のほうではいかがでしょうか。

桐原…「郷育立市」に関して考えるのは、市民が常陸大宮市に対し、どのような「印象」・「思い」を持っているかです。

地元に住んでいる人にとっては、「何もないところ」というのがこの市への一般的な評価だと思います。鮎とか、秋のキノコなどがあるため、常陸大宮市外の都市部に住む方などは「素晴らしい」と思うのでしょうか、市民は必ずしもそうは思っていないかもしれません。「郷育立市」が成立するには、「自分たちが住むところはこんなに良いところである」という再確認が前提として必要なのではないでしょうか。

自然部会との関連でいえば「水と緑」、「山と川」が大きなテーマ、ポイントになると思います。例えば、常陸大宮市は茨城県のなかでも、南方や北方に生育する植物すべてが揃っており、那珂川と久慈川が存在しています。それにもかかわらず注目されないのは、むしろあまりにも揃いすぎているからかもしれません。

久慈川、那珂川とも、とても綺麗な河川で、国土交通省の平成二七年「泳ぎたいと思うきれいな川」でAランクに入っています。市民の方々はあまり興味がない、当たり前と思っているように感じます。市史編さんを通して、常陸大宮市は「何も無いところ」と言えるほど、「水と緑」、「山と川」、自然が豊かな土地なのだといいことを市民の方に理解してもらいたいと思います。

常陸大宮市で生まれ育った人の多くは、やがて外、都市部に出てし

まう。「自分達がここにいて、将来はどうなる」というように、地元に残ることに将来への見通しを見いだせないということもあるでしょう。地元を誇りを持たせ、将来への希望を与え、そして大事にされているという意識を育てることが一番最初の「郷育立市」であると考えています。

もう一度繰り返しますが、今回の市史編さんや調査を通して、常陸大宮市には自然がこんなに揃っているのだということを知り、再発見していただく必要があるでしょう。久慈川も那珂川も含め、豊かな自然、「山と川」、「水と緑」を再確認していただき、常陸大宮市の「素晴らしさ」に誇りを持っていただきたいと思っています。

石井…自然部会では、市民の方が当然のように思っている暮らしを取り巻く自然の価値に気づき、再確認して欲しいということでしたが、その自然と関わり、人々の暮らしを見つめる民俗部会ではいかがでしょうか。

大津…私の個人的な意見ではありますが、自分が職業として文化財行政に何年も携わっていますと、行政的な立場からも考えてしまいます。今日の文化財行政を考えると、人口の流出や高齢化による地域のコミュニティの解体、あるいは財政難というなかでは、文化財行政を積極的にやろうとしても出来ないのだという言い訳をしてしまうような、本来は好ましくない状況が実際にはあると思います。そのなかで、市史を編さんすることの価値を見出し、長い時間をかけて作ることを決定してくださった常陸大宮市には大変感謝しております。

市史編さんの調査で地域に入って行きますと、「私たちは自分たちのことを、自分たちのまちの事を知りたいんだ」という方と出会います。また、「私たちは何でこの行事をやっているんだろうか。ちょっと前のことは分かるけど、その前のことは分からない。このあとの事も不安だ」と言う方もまた、数多くいらっしゃいます。先日も調査の

折りに質問攻めにあいました。「他の地域はどうなっているのだろう」、「他のところはこういうのがあるの」というように。地域の文化に興味をお持ちの方や、今後の継承に不安をお持ちの方がたくさんいらっしゃるのです。財政等の諸問題をできない理由とせず、市史を作り、読んでいただくことは、さらに常陸大宮市の歴史や文化を良く知ってもらうことであり、市民のニーズに応える大変有用な政策ではないかと思えます。つらい歴史というものもありますが、それも含めてよく知っていたくことが、私たちが市民の方から求められている答えに繋がっていくのではないかと思います。そして、文化財行政を市民の方が積極的に支えてくれることに繋がるとは思いません。「こういうことならばこうやろうじゃないか」、「この文化では、こういう意味があつて続いてきている。ならば、それを支える運動に入ろうじゃないか」、そういう動きに繋がるとは思いません、実際に肌で感じるのです。

「郷育立市」という市の方針のなかで、自分たちが市史編さんをすることが、市民の方々と一緒に文化財を考えると、結びつけば、市史をつくる大きな意味になるでしょうし、市の文化財、ひいては常陸大宮市自体を大事にしていく機運になるのではないかと思います。

高橋…大津先生のご意見、おっしゃるとおりだと思います。今回、編さん委員や調査員の中には、若い研究者が多くいらっしゃいます。彼らには、新しい感性や問題意識を大切にして完成までやり遂げていただきたいと思っています。冒頭にもありましたように、常陸大宮市は五つの旧町村が合併することで誕生した自治体です。そして、各旧町村がそれぞれ自治体史をもっていました。今回の市史はただ新しいだけではなく、これまで地元で培われてきた知識の継承も目指していきたいと考えています。添田先生や大津先生の発言とも関わりますが、市

民との連携も非常に重要となってきます。私たちが学問的な方法で知ることができた知識や、整理した結果を地元の方たちに、その都度、還元していくということが大事です。その方法は様々なレベルで、かつ多様に取り組みられるべきだと考えています。市史ができてから還元するのではなく、私たちが調査を続ける傍ら、速報的に調査成果を還元していくことから始めていきたいと思っています。

話すだけなら簡単なのですが、市民とともに自治体史を作るということをどう実践していくのか。添田先生が先ほど紹介していた、香寺町の事例まで達するには、編さん室や編さん委員の力量も問われると思います。そういう共同作業の部分はどうやって実現していくのか、今後の大きな課題だと思います。

石井…今の社会状況から鑑みると、地域力が徐々に低下しているのが非常に大きな問題で、これをどうにかしたいという思いを地域の方は持っているのです。そういうわけで、昔のような排他的な社会ではなく、「お話を聞かせてください」、「調査に来ました」というと、たいへん暖かく迎えてくださいます。聞きたい事もあるし、自分達が伝えたい事もある、というような状況がそこにはあるのだと思います。また、地域によつては、高部地区のように、自分たちの手で地域をどうにかしようと、積極的に人が集まっているところもあります。そういう意味では、地域の方たちに「一緒にやりませんか」と呼びかけるには、とてもいい時期なのではないでしょうか。お互いが自分たちの故郷を知りたい、知らせたいという思いがある時期だと思っていますので、その思いをうまく汲み取って動いていけるよう、形を整えていければと考えています。それでは、時間も押してまいりましたので、高橋先生から最後に一言お願いします。

高橋…有意義な意見の交換会になったのではないかと思います。お疲れ様でした。